宗教間対話と信仰内対話―ブーバーとキルケゴール

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

ブーバーのギムナジウム時代

マルティン・ブーバーは、20 世紀の代表的なユダヤ教哲学者である。多感な少年時代、彼が通っていたギムナジウムでは、全生徒が出席するキリスト教礼拝が毎朝行われていた。ブーバーを含めた少数のユダヤ人の生徒たちにも出席の義務があった。彼らは礼拝の間、目を伏せてうなだれたまま立っていなければならなかった。これがギムナジウムに在学していた８年間、ずっと続いたのだった。このエピソードを読んだ時、私は暗澹たる気持ちになったのを覚えている。ブーバーはこの時の経験から宗教の伝道というものに強い拒否感を抱き、それは生涯変わることがなかったという。

西洋の哲学思想においては、その担い手の多くがキリスト教の信仰に立脚しているので、彼らの著述の中には当然キリスト教的価値観が反映されている。しかし、それが時に一種のバイアスとなって現れていることに気が付く。ユダヤ教の側からは、それはどう受け取られているのだろうか。

私の見たところ、ユダヤ系の思想家の多くはいちいち目くじらを立てず、大人の読み方をしているようだ。それにしても、キリスト教信者でもある哲学者たちが、律法主義やパリサイの徒という言葉、また、真の愛や救済を知らないユダヤ人というような表現を用いる時、文字を追う目がハタと止まってしまう。せっかくの名著が、こんな言い方をしたらその価値が下がってしまわないだろうか、とか、ユダヤ教の信者がこれを読んだらどう思うだろうか、などと余計な心配をしてしまうのである。

アハスヴェルスという文学的形象

実は、キルケゴールの著作にもそのような要素が色濃くあり、ユダヤ教目線からすれば、そのことがずっと気になっている。彼は、キリスト教に反抗する文学的形象として、ドン・ファン、ファウスト、アハスヴェルスの３人の人物を取り上げ、青年時代からこれらについて研究していた。ドン・ファンは感性のレベルで刹那的・享楽的な生き方を、ファウストは理性のレベルで懐疑的な生き方を、そしてアハスヴェルスは信仰のレベルで躓きと絶望の生き方を、それぞれ表明している。

問題はアハスヴェルスという文学的形象である。それは、中世期のヨーロッパで形成されてきた永遠のユダヤ人にまつわる伝説である。アハスヴェルスはエルサレムで靴屋を営んでいた。ゴルゴタの丘へと自ら十字架を背負って歩んでいたキリストが疲れ果て、彼の家の前で少し休ませてほしいと頼んだ。しかし彼はそれを拒否した。その時、キリストは「それでは私は行くが、汝は永久にここにとどまるだろう」と言った。そして、その日以来、アハスヴェルスは死ぬことができず、今もなお生き続けてこの世を彷徨（さまよ）っているという。芥川龍之介は、この伝説に着目して、「さまよえる猶太人」という評伝ふうの短編小説を書いている。

キルケゴール自身、実はこのアハスヴェルスの自己意識を持ち続けていた。キリスト教世界にあって、生まれた時からクリスチャンである人間は、自らの信仰に疑いを抱かず、敬虔なクリスチャンとして生涯を終えていた。それで何の問題もなかった…はずであった。しかし、キルケゴールによれば、彼らのキリスト教信仰は真のキリスト教（新約聖書のキリスト教）からは遠く離れてしまった偽のキリスト教であり、キリスト教世界と思いこんでいたものも巨大な幻に過ぎない。彼は自らの信仰のあり方を徹底的に自己反省することを通じて、キリスト教世界の中に真のキリスト教を今一度もたらそうとしたのである。その際に彼の自己意識に含まれていたのがアハスヴェルスなのであった。

伝説は、アハスヴェルスに今なおこの世にとどまらせている。しかし彼はいまや世界の彷徨からエルサレムに戻り、巡礼者たちをキリストの墓へと案内しているというのである。キリスト教世界の中にあって、真のキリスト教に誘う役割をこそ自分は担っている。そのようにキルケゴールは、著作家としての自己自身を位置付けていた。それはまさにアハスヴェルスの役割そのものではないだろうか。

彼は、自ら背負うことになったこの役割を時に苦痛を感じていたのも事実である。以前にも紹介したが、彼の秘書をしていたユダヤ人のイスラエル・レビンに対して、君はユダヤ人としてキリストに対して自由だから幸福と言ってよいと語ったという。

宗教間対話と信仰内対話

昨今は宗教間対話の時代である。宗教間対話においては、お互いに宗教の優劣を競うことはしない。まして相手を改宗させようとすることもない。どこまでも互いに対等な立場で、自らの信仰を語り合い、一緒に祈りを捧げる（それぞれの流儀による時もあれば、時に相手の流儀に合わせることすら行われる）。そして、世界の諸問題に共通して訴えるメッセージを模索し、災害時には共同でボランティア活動を行うまでにも至っている。

ブーバーは宗教の伝道を拒絶したが、宗教の対話は重視していた。対話というのは、互いに異なる立場だからこそ成立する。「我と汝」という言葉は、彼の対話哲学の鍵概念である。彼は、キリスト教神学者との対話を通じて、心が通い合い、最後に抱擁し合ったことについても報告している。彼はナチスの迫害を逃れてエルサレムに移住したが、今度はユダヤ教徒とイスラム教徒との対立に深く心を痛めることになった。彼がもし 21 世紀に生きていたら、宗教間対話の集会に積極的に参加していたことだろう。とりわけイスラム教との対話には、きっと力を注いだに違いない。

では、キルケゴールはどうか。現在彼が生きていたとして、彼もまた宗教間対話に参加しようとするだろうか。いや決して。存命中も彼はキリスト教世界の中にあって、キリスト教のことばかり考え続けた。彼の関心はどこまでもキリスト教にあった。もしキルケゴールにおいて対話というものがあるとすれば、それはあくまでも単独者としての自己の信仰内対話なのである。この内的対話は、キリスト教世界の中にあって、キリスト教信者たちの心に弁証法的振動を起こし、彼らをして真のキリスト教へと誘う間接伝達の機能を果たす。著作活動全体を通じてキルケゴールが行おうとしたのは、まさにそうした信仰の間接伝達なのであった。

ブーバーの宗教間対話とキルケゴールの信仰内対話。それぞれの思想家の宗教に向かう資質と姿勢によって、対話の形がこうも異なってくるものであろうか。